

フランス的知性の裏切り

稲賀 繁美

国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長

外国人はパリで一旗挙げようと目立ちたがるが、パリ人種は外国人に別段とりたて興味など抱かない。これよりもっと気の利いた寸言が鹿島茂氏にあったはずだが、今や氏の著作は汗牛充棟、生憎探している名文句が見つからない。背伸びは自由にさせてくれるが、相手をチャホヤするほど他人舐めではなくて、醒めて自分を見失わない処世術とでもいえようか。北米合衆国の気風とは違うな、といった実感を抱くのは、あくまで筆者のきわめて限られた体験を過度に一般化する愚を冒すに等しいが、それでもそうした比較観察は、場違いな振る舞いを回避する功德だけは授けてくれる。たしかに北米社会は人の成功を屈託なく賞賛し、惜しげもない声援を送ってくれる。陰湿な中傷や嫉妬を吹き飛ばすだけのおおらかさには、北アメリカ流の生活ならではの爽快感がある。だがそれはややもすれば競争を煽りたて、落伍者を見下す風土とも表裏一体だ。フランスにしばらく住んでいて、何が違うと感じるかといえば、この闇雲なまでにぎらつく上昇志向が顕著ではないことだ。もちろん社会的に成功者もいる。だがノーベル賞受賞者やコレージュ・ド・フランスの教授が、市井ではごく平凡な庶民に溶け込んで隣人づきあいをしている、という質素な生活感情を、いくつか身近な例として知るにつけ、北米だったらこうは安穩にはしておれない、という憐憫の情のようなものに捕らわれる。と同時に日本を含んだ三角測量を試みるなら、こうしたフランス的な社会の肌触りが、日本に致命的に欠如していることも悟られる。舶来著名人や海外で成功を取めた同胞に対する過度な思い入れと、その反動としての妙な劣等感の滓が、マスコミから教育界や学者共同体に至るまで、日本村には淀んでいる。

ここまでの観察だが、個人的な体験だかの区別も定かならぬ実感とはいささか裏腹なのだが、どうも筆者は、フランス派を自称する日本人学者とは肌が合わず、しばしば違和感を覚えてきた。宗主国舐めというのだろうか、我が仏尊しといった臭みが漂ってきて、鼻持ちならない。ところが日本にあってはフランスを誉めそやし、自らもフランス的趣味や知性を体現しておられるが如くに振舞われ、ご自身の華々しい来歴を鼻にかけるような御仁に限って、本場のフランスでお会いすると、いかにも場末の極東から遠路遙々登城したといった風情で、なにやら自分を卑下し、屈曲した態度で、劣位の殖民地出身者よろしき役回りを、頼まれもしないのに演じておられる場面に遭遇する。この落差がいつまでたっても腑に落ちないままで、いつのまにか三十年以上の歳月を閲した。こんな文章を読まれると憤慨される向きもあろうが、ここには冒頭にも触れた不均衡すなわち、日本側の期待過剰と、それに対するフランス側の不感症との板挟みとなった症例が認められまいか。

となれば、ここでフランス学徒（と古めかしい表現を取って用いるが）たるもの、いかにしてフランス的知性を体現しうるや、との問いが浮上する。というのも、体現者を自称している輩に限って、そうした自己表象によって裏切られている例を見受けるからだ。

作文の作法を取り上げてみようか。これは何かのうちに鷺田清一さんから受けた質問だったように記憶するが、たとえば *résumé*, *commentaire*, *compte rendu critique* の三者はどのように違っているのか。これはフランスの教育制度で躰を受けた体験がなければ、容易に答えられまい。斯く申す小生も、何の準備もないままフランス給費留学生試験を受けて初めてこの言葉に接し、何を要求されているのかとんと理解できぬ、という頓馬な体験がある。別段こうした枠組みを体得する *incorporer* ことに特段の意義があろうとも思わないし、いまでは喉元過ぎればで、詳しい規則などもはや忘却の彼方である。だが、そうした規範の存在を知っているのと知らないのとでは、世間の解説格子が異なるのは事実だろう。実名を出すのはかえって失礼というものかもしれないが、松浦寿輝の若い頃の新聞書評などには、原文の用語を見事に換骨奪胎して別の用語に置き換えて要約するという、フランスの教育規範の模範解答のような実例が散見されるし、序・本論・結論といった三段構成をきちんと踏んだ作文に接すると、なるほどすいぶんフランスの論文作法に習熟しておられるな、と感心させられる折節もある。皮肉を一言挟むならば、下手にこうしたお作法に習熟してしまうと、無闇に理屈っぽくなってしまい、かえって日本風の洒落たエッセイなど書けなくなる。日本語の名文を書くには、論理の繁さを落すことが肝心だ、とは大來佐武郎の言葉だったかと記憶するが、司馬遼太郎の文体などもその典型だろう（あれは新聞記者の文章だと酷評する向きもあるが）。小林秀雄など、フランス語の作文などほとんどできなかったからこそ、飛躍の多い文体が評判をよぶことになったのではあるまいか。世間がフランス的知性と持て囃す日本人の論法は、およそ非フランス的かもしれぬ。

どこかで聞いたような床屋談義の批評になりそうなので、このあたりで方向を転じよう。論理の骨格を語彙の配列で表明するにはフランス語は便利な言語といえそうだ。語彙が少なく造語力が枯渇しており、また母語使用者に新語への抵抗が比較的強い（といっても電子機器用語の氾濫は、当方のような年齢の者には苦痛であって、昨今の学生のフランス語には不可解な用語が頻出する）。そうした特性ゆえか、ひとつひとつの語彙が豊かな膨らみをもっていて、文脈によって伸縮自在に寸法を換えるので、それを悪用して議論を拘り替えて相手を煙に巻いたり、論理で打ち負かしたりする快感は、これをフランス的知性と呼んで差し支えないのだろうか。所詮大学生になってからのつけ刃に過ぎず、初歩第一歩のその日に蓮實重彦氏から、すでに手遅れですので、と宣告された外国語習得に過ぎないから、多々限界のあることは明白だろう。それでも同様の、それこそエスプリなどと呼ばれる機知は、英語で生半可な会話などしている程度の水準では、とても発揮できない。

米語の場合、所詮移民社会の共通作業言語という宿命に由来する大雑把さを免れないし、繊細な言葉遣いは可能だとしても、それは今現在の特異な用語論に依存する傾きが大きく、時代とともに容易に通用しなくなる。反対に英語となると、ここには身分社会と教養の上下がいまだに幅を利かせていて、いかにカリブ海やインド出身のインテリにお株を奪われているとはいえ、ロンドンでは抽象的内容での優劣より、出身社会階層の弁別が先に立つ。そんなことを言うなら、フランス社会だってピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』が有効な程度には、趣味によって階層の上下が裁然と分析できる、と反論される読者

もあろう。だがむしろ、ベアルヌの田舎出の少年が長じてコレージュ・ド・フランスの席をまっとうするといった立身出世物語が成立するためには、その分析枠として *distinction* という弁別装置が、説話論的に不可欠だったという共犯関係は認めたい方が安全だろう。

これを要するに、ヘクサゴンとその周辺に広がるフランス語圏との関数や力関係を無視して、はたしてフランス的知性なるものが発揮されうるのか、という次元に考察を移す必要も生じてくる。大西洋を跨ぐならば、現在なお北米のとりわけ東海岸では、フランス語的知性の片鱗を覗かせて見せる素振りには、知識人社会で地歩を築くには、高慢ちきだが有効な駒であるし、ブラジルなどはポルトガル本国より遥かに巨大な言語圏として、有識者階級ではフランス語の通用性が今日なお社会的な榮達と結びつくだけの有効性を保っている。翻るに、極東の島国では、フランス語はハナから実用には無益な審美的次元に切り詰められて流通し、きわめて限定された文学や哲学、美術や音楽といった有閑階級の慰みの世界でばかり繁盛し、英語の商業的有用性や、かつてのドイツ語の学術的権威とは無縁に近い、味噌っかす的地位に安んじて甘んじてきた嫌いもある。だがそうした自己限定、自己規定が、極東においてフランス的知性の有効活用の幅を無意味に狭めてきたのではなかったか。アフリカのインテリたちとの知的交流の道具として、あるいはアラブ世界の文化人たちとの交友の手段として、フランス語はきわめて有効な道具たり続けている。ポストモダンと言うならば、旧宗主国に収斂するフランス中心主義を脱却したフランス語圏世界との遣り取りにこそ、フランス的知性善用の将来が、豊かな沃野として広がっている。

今度は下手な政治演説めいてきたので、再び転進して、そろそろ三題噺を締め括ろう。

知的社会の雇用創出が二一世紀の生き残りには必須の課題だろう。だが現在までのフランス語を含む語学教育は、残念ながらそうした雇用創出への志向を欠き、雇用喪失への消極的な対応に追われてきた。フランス文学専門家一辺倒の養成は、時代の要請に背馳している。もちろん反時代的反骨がフランス的知性のこの国におけるあり方の一面を代表してきたことを否定しようとは思わない。だがそれが実用性の側面を抑圧することに繋がるならば、それは反骨ではなく反動だろう。仏文学者たらざればフランス的知性の具現たらざるべからず的な排他主義は、結局は自分の首を絞める愚行へと埋没する。隣国の中国は共産党幹部の子弟を大規模にグラン・ゼコールへと派遣している。次世代の指導者層のうちにフランス的知性の遣い手を育成しようという国家的事業の一環である。前田陽一や神谷美恵子兄妹を見ただけでも、エリート・インテリとして世間の耳目を引く存在が、本当に幸福な人生を歩めたのかどうかは、俄かに弁じられまい。Noblesse oblige というが、知性がかえって人生に俗人以上の負担を負わせかねない。かれらの人生がかれらの資質や能力に報いるだけのものだったか否かも、疑問である。そして今や、特権的な外国体験をひけらかすことが社会的優位を約束するような時代は終焉している。留学の社会的格付けはすっかり下落し、その一方で日本留学組の近隣諸国の若者には、結局日本に愛想をつかし、幻滅して祖国へ旅立つ者も多い。フランス的な普遍性ある知的覇権を日本に望みうるか、あるいは望むべきか否かには、議論もあろう。だが善悪はとにかく、そうした範例を日本社会に提示するという責務を、仏蘭西派日本知識人は果たし損なってきた。澁澤クロード賞受賞者の片隅にあって、自らの志の低さが賞の名に悖ることを、あらためて痛感する。

1997 年度ルイ・ヴィトン ジャパン特別賞